

美術史学

◇教員◇

教授 秋山聰、高岸輝、増記隆介

◇学生◇

学部 25名 修士課程 13名 博士課程 11名

(1) 美術史学へのいざない

形あるもの、眼に見える世界への飽くなき追究、それが美術史学です。芸術の研究は文学部の重要な使命のひとつですが、なかでも視覚が捉える色と形、そこに宿る美を具体的な造形に即し、歴史的に考究する点に美術史学の特徴があります。

研究対象となるのは、古典的な芸術作品としての絵画・彫刻・建築、実用と美を兼ね備えた工芸やデザインだけでなく、写真・映像・インスタレーションなど現代アートの領域まで含みます。扱う地域も日本、アジア各地、中近東、欧米まで広がっています。

美術史は、高校までほとんど教育が行われていないため親近感が湧きにくいと思います。しかし、コンピュータ処理による画像や情報通信端末、AIの急速な進展など、視覚表現の技術と可能性が日進月歩で進化する現代において、それらのリテラシーに長じ、容易に使いこなしている皆さんにとって、ビジュアルな学問である美術史は決して敷居の高い分野ではありません。

必要なのは視覚的な美に対する強い関心、ものを作り出す人間の営みに対する敬意、創造という行為への参加意欲。美術史学は、机上と造形が所在する現場とを往還する、アクティブな学問です。視覚で世界を認識する感性と、遺された作品や文献の断片をつなぎ合わせて歴史の潮流を把握する知性、両者のハイブリッドが重要です。

美術やデザインに強く惹かれる人、世界中を旅することに憧れる人、美術館・博物館での学芸員や文化行政に携わりたい人、あるいは自ら表現者たらんと欲する人、そんな人々を歓迎します。最高の作品を体験し、鍛え上げられた眼と感性と知性は、将来、どの分野に進もうとも強い武器になるはずです。

(2) 美術史学研究室の人々

美術史学研究室は赤門のすぐ近く、赤門総合研究棟の7階にあり、3名の専任教員が所属しています。

秋山聰 教授は、ドイツ・ルネサンスの巨匠デューラーなど**西洋美術史**が専門。現在は各地のキリスト教会に秘蔵される聖遺物（キリストや聖人にまつわる遺品）の研究でも知られ、宝物と美術の境界、宗教儀礼と美術の関係、東西の聖地や宗教文化の比較へと広がっています。『天才と凡才の時代—ルネサンス芸術家奇譚』（芸術新聞社、2018年）、『聖遺物崇敬の心性史—西洋中世の聖性と造形』（講談社学術文庫、2018年）、入門書として『西洋美術史（美術出版ライブラリー—歴史編）』（共同監修、美術出版社、2021年）を参照するとよいでしょう。

高岸輝 教授は、**中世の日本美術史**が専門。絵師に活動を支える社会基盤や権力との関係を軸に、絵巻を中心とする国内外の作品調査を進めています。著書に『日本美術史（美術出版ライブラリー—歴史編）』（共同監修、美術出版社、2014年）、『中世やまと絵史論』（吉川弘文館、2020年）、『ボストン美術館日本美術総合調査図録』（共同監修、中央公論美術出版、2022年）があります。また、人文情報学（デジタル・ヒューマニティーズ）の手法を日本絵画の研究に導入する方法についても共同研究を進めています。

増記隆介 教授は、**古代の日本美術史**が専門。日本における仏教絵画の形成過程を広く東アジアの文化交流という視野から描き出した『院政期仏画と唐宋絵画』（吉川弘文館、2015年）のほか、『天皇の美術史』1（古代国家と仏教美術）（編著、吉川弘文館、2018年）、『古代絵画史研究』（吉川弘文館、2026年）があります。文化庁での勤務経験をふまえ、文化財の修理や保護についても精通しています。

加えて、学内から5名の教員が美術史学に関する講義・演習や論文指導に当たっており、地域や時代を幅広くカバーしているという点で国内随一の充実度を誇ります。文学部次世代人文学開発センターの**芳賀京子教授**は、地中海地域の古代美術史が専門。近年の著書に『西洋美術の歴史』1（古代：ギリシアとローマ美の曙光）（中央公論新社、2017年）があります。古代彫刻の3D計測・分析やVR（バーチャルリアリティ）技術を活用した展覧会会場の撮影などにも取り組んでいます。

東洋文化研究所の**柗屋友子教授**はイスラーム美術史の専門で、東洋と西洋をつなぐ美術の交流についても論じおり、著書に『イスラームの写本絵画』（名古屋大学出版会、2014年）があります。同研究所の**板倉聖哲教授**・**塚本麿充教授**は中国の絵画史が専門。東アジアや欧米を中心に作品調査を進め、『中国絵画総合図録』（世界中に所在する中国絵画を総覧する巨大プロジェクト）の編集事業を継続し、『アジア仏教美術論集』（2017年～、中央公論美術出版）各巻の責任編集を務めるなど、中国美術史の研究拠点を形成しています。学芸

員の経験を生かし、国内の展覧会企画にも数多くかかわっています。

総合文化研究科の**松井裕美准教授**は、フランス近現代美術が専門。『キュビズム芸術史 20世紀西洋美術と新しい〈現実〉』（名古屋大学出版会、2019年）、『もっと知りたいキュビズム』（東京美術、2023年）など、20世紀に起こった視覚の革新を精力的に研究しています。

授業は上記のほか、学外から非常勤講師を招き、各分野の最先端を語っていただいています。本年度の開講科目は下記になります（*は文化交流特殊講義）。

奥健夫 講師（武蔵野美術大学教授）	「日本副刻史概説 特に平安後期から鎌倉時代まで」
児嶋由枝 講師（早稲田大学教授）	「西洋中近世美術の諸問題」
佐藤直樹 講師（東京藝術大学教授）	「西洋美術史におけるラファエッロ主義研究」
中村るい 講師（東海大学教授）	「ギリシャ絵画における神話と宗教」*
奈良澤由美 講師（城西大学教授）	「装飾を考える 古代・中世地中海の装飾史」*
菅原真弓 講師（大阪公立大学教授）	「文化資源としての『浮世絵』（文化資源学特殊講義）」
朝賀浩 講師（皇居三の丸尚蔵館）	「博物館資料論（美術工芸品）」

（3）美術史学専修課程での日々

美術史学研究室に進学すると、Sセメスターに3～4泊の関西見学旅行が行われます。「旅行ゼミ」と通称される授業で、3年に進学した学生は各自が担当する作品を決め、それに関する研究をまとめたうえで、美術館・博物館や寺社の場で口頭発表を行うという内容です。美術史学の入り口となる授業であり、偶然ここで担当した作品に惹かれて、そのまま一生の研究テーマとする人もいます。図録に掲載された写真やネット上の画像と、現場で観る作品とは印象が大きく異なります。机上の印刷物や講義で映写される写真と、本物から受ける感覚との差。それを認識し、補正し続けることが研究には必須です。

語学についても、駒場時代に引き続き研鑽を重ねる必要があります。日本・東洋美術史を目指すなら、古文、漢文、くずし字、中国語などを読む必要があり、西洋美術史であれば、英語、フランス語、ドイツ語のほか、研究対象によって古代ギリシア語、ラテン語、イタリア語、オランダ語、スペイン語などに挑戦することになるかもしれません。

講義や演習に関しては、全てに出席することは不可能なほど幅広く設定されていますので、3年生のうち、日本、東洋、西洋とバランスよく受講することをお勧めします。少

人数で開催される演習は、外国語文献の講読だけでなく、一枚のスライドを巡って活発な議論が展開される切磋琢磨の場です。また、大学院進学を少しでも考えている人は、学芸員資格の取得についても検討する必要があるでしょう。

やがて、4年生の6月になると卒論構想発表会が開催され、教員と同級生の前で卒業論文の構想を発表することになります。卒論テーマの設定や論文執筆については、伝統的に学生の自主性を尊重する形をとっています。ですが、放任というわけではありませんので、教員や先輩を積極的に活用し、美術史学の方法論と研究史を着実に踏まえた、力作を期待しています。扱う作品は著名なものほど謎に満ち、研究論文も多いため、知的訓練としての卒論には好適です。

(4) 研究室の外へ

東京大学で学ぶということは、首都圏をキャンパスとすることにほかなりません。東京という都市は、美術館・博物館の数やコレクションの質、世界中から巡回してくる展覧会の内容において、ニューヨーク・パリ・ロンドンに匹敵します。美術史を学ぶ上で、これほど有利な位置はありません。本郷キャンパスから徒歩20分以内で、上野公園のミュージアム群（東京国立博物館、国立西洋美術館、東京都美術館、東京藝術大学大学美術館など）にアクセスでき、東京国立博物館、国立西洋美術館では、東大の学生証を提示すれば常設展が無料（特別展は割引）で観覧できることも憶えておいてください。東京国立博物館資料館、東京文化財研究所では、写真や図書の閲覧を行うことも可能です。本郷から電車で30分以内ということになると、訪問できる美術館は無数といってよいでしょう。

海外での調査や留学など、遠方に所在する美術作品を現地足を運んで見ることの感動は何ものにも代えがたく、研究の原動力となります。一方で、国内外の美術館・博物館・図書館では、作品の高精細デジタル画像のインターネット公開が急速に進んでいます。実作品をひとつひとつ手に取って分析するという古典的な研究手法と、デジタル画像やテキストを駆使したデータ処理による作品群の総合的な把握とを両立させることによって、これからの美術史は新たな展開を見せていくことになるはずです。

(5) 文化を支える仕事

卒業生の進路はさまざまです。学部卒に関しては、銀行、証券、商社、メーカー、情報通信、公務員など幅広く、新聞社の文化事業部や出版社など美術史を学んだことを直接生かせる就職をする人もいます。社会のなかで、美術や文化を支える人材として、活躍することを願っています。

大学院は、年度によって増減があるものの学内外からの志望者を集めています。進学

ためには充実した卒業論文を提出、外国語2科目と日本・東洋・西洋美術史についての専門試験からなる1次試験に合格し、卒業論文に基づく口述試験を突破する必要があります。修士論文は、専門について深く掘り下げ、作品そのものの調査や作家に関する一次資料を実証的に考究し、学術論文として公刊できる水準が理想です。優れた修士論文の場合、博士課程進学後に学会発表や学会雑誌への投稿を勧めており、査読を通過して論文が公刊されると研究者への第一歩を踏み出したことになります。その後は、博士論文の執筆に向けての研究ということになりますが、外国の美術を扱う場合、博士課程の時点で留学する人も多く、留学先で博士号を取得するケースもあります。修士課程修了後、あるいは博士課程在籍の段階で、学芸員に採用される人もコンスタントに出ています。

駅や街角で見かける美術展覧会のポスターの陰には、学芸員がいます。華やかな展覧会の裏側で、研究、文化財の修理や保存、社会人や青少年に対する教育普及などが地道に行われています。美術史学研究室の教員は、展覧会の企画・監修、展示作品の調査、カタログの執筆、講演会の講師といった形で、ミュージアムの現場、そして学芸員と密接に交流しながら、研究教育活動を進めています。

学芸員を目指すにせよ、大学教員を目指すにせよ、研究職への就職は決して広き門ではありませんが、美に対する情熱を維持しつつ、じっくり腰を据えて研究に励むことで、おのずと道が開けてくるものと思います。卒業生たちの活躍は、明治以来の美術史学を牽引するとともに、我が国の美術の振興に大きく寄与しています。

(6) 美術という新しい視点を獲得すること

美術は、個人の「趣味」の領域に留まるものではありません。社会が高度に成熟する一方で、戦争・貧困・疫病・差別・環境問題など人類共通の課題は複雑化しながら広がっています。現代を生きるアーティストたちは、これら諸問題に対し表現を通じて対峙しています。美術史学もまた、文明の発生以来、美術がいかに社会と関わり続けてきたのかを長期的に把握することを通じ、現代の位置を理解し、未来を展望することを目指すものです。大学で、美術、芸術を専門的に追究することは、これまでの経験とは異なる角度から世界を俯瞰する、新たな視点を獲得することにほかなりません。

このほか、研究室の詳しい情報は、ホームページ (<https://arthistory.l.u-tokyo.ac.jp/>) も参照してください。